

## 横笛伝承考―法華寺・天野別所―

濱 中 修

### はじめに

横笛の伝承は、平家物語の中で、維盛の高野山逃避行の記事を語るに際して紹介されている。維盛が頼った高野山の僧侶・滝口入道の若き日の恋愛悲劇譚である。武将や公家たちの権力争いが中心をなす軍記物語においては、数少ない恋愛譚である。

漸く尋ね当てた嵯峨野の庵で、滝口からつれない態度を示されて絶望した横笛は、長門本や四部合戦本では、別れた直後に桂川にて入水したとされている。この展開は、横笛の恋心の激しさ、純粹さ、そして少女ゆえの一途さをよく物語っていて、恋愛譚としては秀逸である。であるがゆえに、後に平家物語に取材して成立した『横笛草紙』もこの展開を採用している。ところが、別のテキストではこの自然な展開を捨てて、一旦、東山の清閑寺に入つた後に、桂川にて入水したとする迂遠な経緯を語るものがある。

或は、入水の件は放擲して、奈良の法華寺に入った後に、ほどなく病死したとする本もある。

異本群はなぜ、自然な、また感動的な物語展開を捨ててしまったのか。そして、嵯峨野にて横笛の悲劇的にして可憐な生涯が完結しないで、その伝承地が他の地域へと移つたのはなぜか。本稿は、横笛伝承の異伝の検討を通じて、伝承の展開を誘つた要素を考えていきたい。横笛とそれらの地との結びつきの理由も、個々の伝承がもつテーマ性と併せて考えることで、新たな相貌を示してくれることとなろう。

### 一 法華寺の横笛

平家物語における横笛伝承は周知の内容ではあるが、論述の必要上、ここではまず長門本平家物語<sup>1)</sup>によってその概要を見ておこう。

三条斎藤左衛門の子の斎藤滝口時頼は、小松殿に出仕していたが、建礼門院の侍従であった横笛と二世の縁を結んで通っていた。横笛は神崎の君の長者の娘で、その美しさは比類なく、清盛が福原から上京する折に相い具して建礼門院へ参らせていたものである。二人の関係を知った時頼の父は、「然るべき世にあらん人の聾子とも」しようと思っていたのに、横笛のような「世になき者」と割りなき関係となったことを責める。父と横笛との間に立って苦慮した時頼は、「親の諫を背かば不孝の身になりぬべし、従はば又あぢきなし。女の思ひをかうぶれば、五障三従の罪深しと思ひ切りて、生年十八の年、俄に菩提心を起し、嵯峨なる所にて出家」したのであった。時頼の訪問もなく悲しんでいた横笛は、その後、風の便りに時頼の出家を知り、法輪寺に参籠してその草庵の場所を求めて虚空蔵菩薩に祈念する。忝くも虚空蔵の示現によりその庵を知ることができた横笛は、さっそく教えられた庵を尋ね歩いて、声をかける。折しも法華経の提婆品を読んでいた滝口入道は、横笛の、今一度逢いたいとの涙ながらの声に心を乱しながらも、これこそは生死の絆であると返事もせずに行った。横笛は「後の世までと契りしに、早くもかはる心かな」と泣きながら庵を後にする。横笛は都の老いた母のことを気に掛けながらも、「かかるうき世に存へて、何にかはせん」と思い、生年十七にて桂川に身を投げた。その騒ぎを不審に思った滝口が尋ねて行くと、あ

らざるさまに成り果てた横笛の姿を見つけるのであった。入道は自ら薪を集めて茶毘に付し、空しき骨を拾って高野山の奥の院にて行いすまして五六年になった。

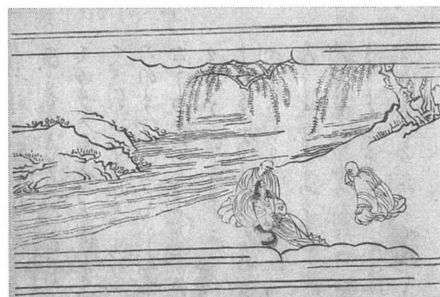
このように、長門本や四部合戦状本は、嵯峨野での悲しい別れと、その後の横笛の桂川での入水を一連の出来事として描いている。

このふたつの出来事をひとつながりのものとして、問を置かないで描くことで、横笛の失恋の悲しみの深さをより自然に表現しえている。

ところが、平家物語諸本中には、その両者の間に、横笛の出家という記事を挿入するものがある。

覚一本と八坂本系統の百二十句本は、横笛が奈良の法華寺で尼となり、ほどなく恋の思いの積り故に病死したとする。

横笛、なさけなう、うらめしけれども、力なう涙をおさへて  
帰りけり。滝口入道、同宿の僧にあふて申けるは、「是もよ  
にしづかにて、念仏の障碍は候はねども、あかで別し女に、



桂川で入水した横笛（『横笛草紙』国会図書館蔵）



法華寺本堂

此すまぬを見て候へば、たとひ一度は心づよく共、又もしたふ事あらば、心もはたらき候ぬべし。いとま申て」とて、嵯峨をば出て、高野へのぼり、清浄心院にぞ居たりける。横笛もさまをかへたるよし聞えしかば、滝口入道一首の歌を送りけり。

それまではうらみしかどもあづさ弓まことの道にいるぞうれしき

横笛が返ことには、

それとてもなにかうらみあづさ弓ひきとむべきこと、ろならねば

横笛は、その思ひのつもりにや、奈良の法花寺にありけるが、

いくほどもなくて遂にはかなく成にけり。(覚一本平家物語)<sup>(2)</sup>

しかし、滝口入道が住む高野山の近くの天野別所にて尼生活をするのなら十分に納得がいくが、なぜ奈良なのか。また同じく横笛の死とは言っても、滝口の出家した嵯峨野の桂川で入水したというのと、

遠い奈良の寺に入って病死したというのでは、悲劇的恋愛譚としてのインパクトに相当の開きがある。覚一本などはなぜ、あえて横笛を奈良の法華寺で尼となったという設定をしたのか。

この格式高い門跡尼寺で有名なのは、光明皇后の施行の湯屋で賤形の僧(阿闍如来)を洗うという話と、彼女が観音の化身として観念されていたという伝承である。観音化身説は次のごとくである。

抑印土仏師来朝者。此天然乾陀羅国帝見生王。欲奉拜生身観世音。発願入定三七日。告曰。欲拜生身観世音。従是東海州大日本国聖武王之正后。可拜光明女之形云々。(中略)爾後皇后見仏師時。非后身女体之肉身。顯現於十面観音像也。則任仰観音三軀造立之一体者。使者仏師従身帰国。一体者安置於内裡。今法花滅罪寺観音也。一体者安置施眼寺也。(興福寺濫觴記)<sup>(3)</sup>

横笛が入寺した法華寺は女性と観音に関わる信仰の寺として有名であったのである。

さて、横笛の話は、これを滝口の側から見れば、彼女の存在を機縁として滝口が仏道に入ったという話である。恋愛を機縁に男性が真の仏道に目覚めたという話は少なくない。

中でも、中世の特異な恋愛譚としての型をもつのは、「稚児物語」である。その代表的な作品たる「秋夜長物語」<sup>(4)</sup>では、恋愛対象

たる稚児は観音の化身とされた。物語の内容は以下の如くである。

今は昔、比叡山の桂海律師は自らの仏道修行の至らなさを嘆き、石山寺に参籠して道心堅固なるを祈っていたところ、七日めの夢に容顔美麗な稚児を見る。叡山に帰ったのもその面影を忘れえず、修行も手につかない。石山観音にこのことを訴えようと再度参詣したところ、途中、三井寺の辺りで春雨に遭ったので、聖護院の庭先で雨宿りをする。その折、先の夢中の稚児と瓜二つの稚児を見かけ、桂海は心奪われる。叡山に帰ってからも、稚児梅若への想い止み難く、梅若の侍童を通じて歌を贈ると、意外にも梅若君より返事があり、二人は相思相愛の仲となる。三井寺のさる房にて逢うことを得た二人の想いはさらに強まるのであった。叡山に帰った桂海が鬱々としているのを風の便りで耳にした梅若君は、心配のあまりに叡山を目指す。慣れない遠出に疲れ果て、唐崎の松の木陰で休息していた梅若君は、山伏姿の天狗に攫われて、大峯山釈迦獄に幽閉される。梅若君の突然の失踪は三井寺と比叡山の対立の発火点となり、両者の僧兵らによる武力衝突によって、三井寺は新羅大明神を残して灰燼に帰してしまふ。天狗たちの四方山話からことの顛末を知って悲嘆に暮れる梅若は、龍神の助けを得て都に帰還する。しかし、我が身ゆえの重大な災厄を目の当たりにして生きる意欲を失い、桂海への手紙を侍童に託して近江の瀬田橋より入水する。自殺を暗示する文面に驚いた桂海は、瀬

田川下流の供御の瀬で、今は変わり果てた梅若を発見する。桂海は梅若を茶毘に付した遺骨を守って西山岩倉に庵を結び、梅若の菩提を弔った。侍童も出家して高野山に上った。三井寺の僧たちは、新羅大明神の夢告にて、今回の事件は桂海を発心させるための石山観音の計らいであり、梅若君は観音の変化であることを知らされた。桂海は後に雲居寺の瞻西上人として貴賤より尊崇された。

比叡山の桂海はもちろん、既に僧侶であったわけであるが、貴賤から尊崇される雲居寺の瞻西上人へと変身すべく「発心」したのは、恋人たる梅若の死を契機としている。三井寺の消失という大災厄が、観音の方便であったという理屈はなかなか通じにくい。が、「仏閣僧房ノ焼ケタルハ、造営スルニ財施ノ利益在リ。経論聖教ノ焼ケタルハ、是ヲ書クニ転写ノ結縁アリ。有為ノ報仏豈生滅ノ相ナカラシヤ。」という宗教的論理が残された新羅大明神により三井寺の僧侶らに示された。

そして、さらに桂海と梅若に関しては「此悲シミニ依リテ桂海ガ発心シテ若干ノ化導ヲ至サンズル事ノウレシサニ、歡喜ノ心ヲバ顯シツルナリ。山王モ是ヲ賀シメ給ハン為ニ来リ玉エリ。石山ノ観音ノ童男変化ノ得度、真ニアリガタキ大慈大悲カナ」とも告げるのであった。この明神の告示を受けて、三井寺の僧侶らは、「サテハ若公ノ身ヲ擲玉フモ観音ノ変化也」と得心するのであった。



恋人たる稚児梅若を観音の化身とする表現は、単なる文学的誇張ではない。天台教団の、一稚児二山王という稚児鍾愛の風潮の中で行われていた稚児灌頂の秘儀はその証左であろう。この稚児灌頂の観念世界においては、稚児は「汝自<sub>レ</sub>今日<sub>レ</sub>已後本名<sub>ノ</sub>下<sub>ニ</sub>加<sub>ニ</sub>丸云字<sub>ノ</sub>可<sub>レ</sub>称<sub>ニ</sub>某丸<sub>一</sub>。此灌頂<sub>ハ</sub>是観音<sub>ノ</sub>大慈<sub>ノ</sub>灌頂也。(中略)汝<sub>ニ</sub>身深位薩埵往古如来也。故来<sub>ニ</sub>此界<sub>一</sub>度<sub>ニ</sub>一切衆生<sub>一</sub>と観想され、一方、その灌頂を受けた稚児と相對する僧侶は、「故<sub>ニ</sub>我等一切衆生預<sub>テ</sub>観音大慈<sub>ニ</sub>断<sub>レ</sub>無明煩惱<sub>一</sub>之間、無<sub>レ</sub>過者也」とされる(『兒灌頂私記』叡山文庫、真如藏)。

このように、稚児にせよ恋人にせよ、愛する存在に観音の面影を見ることは、中世においてはさして特異な発想ではなかった。

平家物語でも、文覚上人の出家由来譚として有名な、哀れなる犠牲者袈裟御前は、袈裟御前の夫の刑部左衛門や、誤って袈裟御前を手に掛けた遠藤盛遠文覚にとつては、袈裟御前は「此女房ハ観音ノ垂迹トシテ、吾等方道心ヲ催シ給フト観ズベシ」(延慶本)と観念されていた。

高野山に関わる中世の仏教的物語の文脈でも、男(僧侶)を発心へと導く悲劇的人物は、仏菩薩と見られていた。

『三人法師』<sup>(5)</sup>の、高野山中における三人の僧侶のそれぞれの懺悔譚のうち、一人目と二人目のそれは連動する哀話である。足利尊氏の近習を勤めていた粕谷四郎左衛門は、主人の伴をして三条

殿の屋敷に赴き、その酒宴の席で、給仕に出てきた美しい女房を見初めて恋の病となる。その後、出仕しない粕谷を心配して尊氏が医師や朋輩の佐々木を遣わして、病気の原因が女房への恋の病であることが判明する。尊氏の口利きでその女房と結ばれることとなった粕谷は、十二月二十四日に日頃信仰する北野天神へと久しぶりに参籠することにした。その夜の参籠中に、都にて若い女房が盗賊に殺された、という人の噂話に胸騒ぎを覚えて現場に駆けつけてみると、まさしくその被害者はかの女房であった。粕谷は我故にこのようなむごい最期を遂げたかと思ひ、やがてその夜のうちに出家して高野山に上り、この二十年ばかり女房の菩提を申う日々を送っていた。この粕谷の哀話を聞いて、次に語り始めた玄竹(三条の荒五郎)は、その上臈を殺したかつての盗賊こそ自分であると、妻子を養うために無慈悲にもそのような所業に及んだ過去を隠さずに懺悔するのであった。

「さこそ無念におほしめし候らん。いかやうにも愚僧を殺し給へ」と殊勝な姿勢の玄竹に対して、粕谷入道は、

たとひ世の常の発心なりとも、互に此姿になり候うて、何の心が候べき。まして此人故の御発心なればことさらになつかしく思ひ申すなり。まことにさも候はゞこの人は菩薩の変化なり。かゝる女人と現れて、無縁のわれらを助けんが為に、大慈大悲の御方便と思ひ候へば、なをなを古こそ忘れがたく

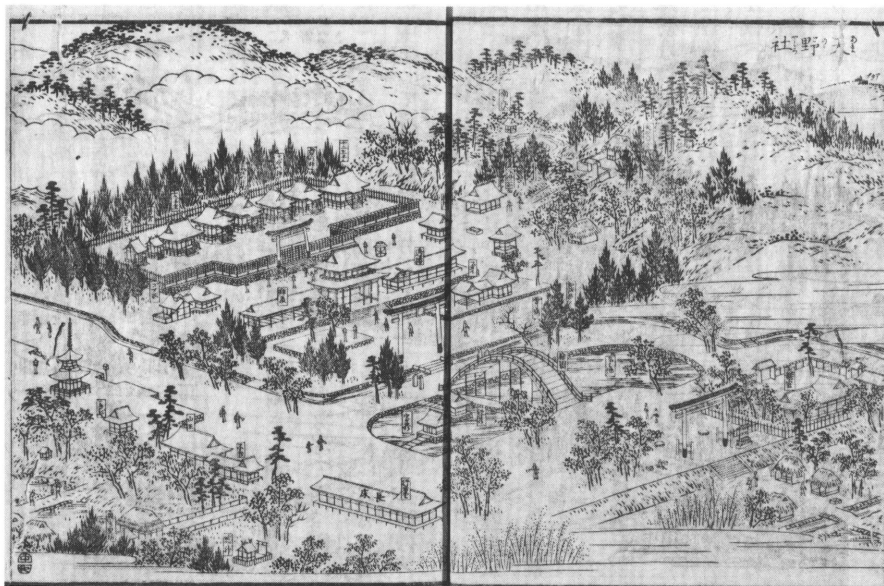
候へ。かゝる事候はでは、いかゞわれら出家して、うき世をいとひ、かの無比の楽をうけん事は、憂いの中の喜びなり。今日より後は同心なるべき事こそ、返す返すうれしく候へ。と言つて墨染の袖を濡らすのであつた。

翻つて考えれば、横笛も時頼を堅固な発心へと導いたからにはまさに善知識であり、その後まもなくこの世から消えた（死）のだから、横笛も観音と観念されても不思議ではない。

そして、そのような働きをした横笛が、観音化身伝説で有名な法華寺に入つて、間もなく病死したとする平家物語諸伝本中の新たな設定は、横笛に観音の面影を投影するためのものだろう。滝口入道が出家した京都からも、修行の地を選んだ高野山からも近くはない奈良の法華寺で尼となつたという設定の理由としては、この寺の有名な伝承たる光明皇后の存在を考えざるをえない。横笛をして、奈良の法華寺へと入寺せしめた伝承の力とは、横笛の面影の中に観音の姿を見ようとする観念であつたらう。

## 二 天野別所

高野山の麓に位置する天野別所は「山上大門より乾の方に当たり、路程百五十余町を隔つ。山麓矢立辻・不動野・神田を経て二つ鳥居に出づ。これより左へとり、八町坂を下りて幽寂の勝壞あり。天野といふ。四周青巒連続し、その中に平坦あり。」



丹生都比売神社（『紀伊国名所図会』国会図書館蔵）

〔紀伊統風土記〕<sup>(6)</sup> 高野山之部 卷二〇 天野社上」という山中の幽邃境である。と共に、高野山との密接な関係から、「此地山巒四周して幽僻の地なれども、天野明神鎮まり坐る地なるを以て、常に参詣の人多く、年中神事祭礼も多き故、高野の僧徒常に往来し、或は来り遊ぶ者も多し。因りて村中旅舎茶店等あり。又滑稽様の事をなし、遊戯の業を産業とする者多く、山中寒陋の風少し。」〔紀伊統風土記〕 伊都郡之部 卷四八 天野莊上天野村」と、丹生都比売明神への信仰を中心に高野山の僧侶などが多く参詣していた。

そのような、高野山と密接な関係を有する天野別所に、横笛が上ったという伝承が『源平盛衰記』<sup>(7)</sup> 卷三九に紹介されている。

又異説には、横笛は、法輪より歸りて髪をおろし、双林寺に有りけるに、入道の許より、

しらま弓そるを恨と思ふなよ真の道にいれる我身ぞ

と云ひたりければ、女返事に

白真弓そるを恨と思ひしにまことの道に入るぞ嬉しき

其後、横笛尼、天野に行きて、入道が袈裟衣す、ぐ共いへり。

横笛がこの天野別所に来ることになったのは、もちろんこの天野が、滝口入道の籠っている高野山の麓に当たるといふ距離の近さに由来するからではあるが、彼女がこの天野に引き寄せられたのには、彼女の先輩たちの影響もあったに違いない。

この天野の土地は、高野山で修行する家族をもつ女性たちが、尼となって家族の世話をする土地としての性格を持っていたらしい。

西行法師は勿論、高野の聖としての一面を持っていた歌僧であるが、その妻と娘が天野にて尼となって住んでいたとする伝承がある。まず、西行仮託の説話集『撰集抄』<sup>(9)</sup> 卷九では、長谷寺に参詣していた西行が、偶然にも妻と再会する場面が記されている。

其昔、かしらおろして、貴き寺々まいりありき侍し中に、神無月上の弓はり月の比、長谷寺にまいり侍りき。日くれか、り侍て、入あひの鐘の声ばかりして、物さびしきありさま、木ずゑのみち嵐にたぐふ姿、何となく哀に侍りき。扱、観音堂にまいりて、法施などたむけ侍りて後、あたりを見めぐらすに、尼念珠をする侍り。心をすまして念珠をする侍り。あはれさに、かく、

思入てするずゝ音の声すみておほえずたまる我なみだかなとよみて侍を聞て、此尼声をあげて、こはいかにとて、袖にとりつきたるをみれば、年比階老同穴の契あさからざりし女の、はや、さまかへにけるなり。浅猿く覚て、いかにといふに、しばしは泪むねにせける気色にて、兎角物云ことなし。や、程経て、なみだをおさへていふやう、きみ心を発して出給し後、何となくすみうかれて、よひ毎の鐘もそゞろに涙を

もよほし、曉の鳥の音もいたく身にしみて、哀にのみ成まされ侍しかば、過ぬる弥生の比、かしらおろして、かく尼になれり。一人の娘をば、母方のをばなる人のもとに預置で、高野の天野の別所に住侍るなり。さても又、我をさけて、いかなる人にもなれ給はゞ、よしなき恨も侍りなまし。是は実の道におもむき給ぬれば、露ばかりのうらみ侍らず。還て知識となり給ふなれば、うれしくこそ。別奉りし時は、浄土の再会をどこそ期し侍りしに、思はざるに、身づから夢とこそ覚ゆれ、とて泪せきかね侍りしかば、さまかへける事のうれしく、恨を残さざりけん事のよろこばしさに、そゞろに泪をながし侍りき。扱あるべきならねば、さるべき法文などいひをしへて、高野の別所へ尋ゆかんと契て、別侍りき。

西行に捨てられて都に残されていた妻が、尼となつて、高野山の麓の天野別所に庵を結んでいたのである。また、西行が出家するに当たつて、緋り付くのを足蹴にされた娘はどうなつたかという、鴨長明の『発心集』<sup>(10)</sup>巻六によれば、彼女もやはり天野に辿り着いていたらしい。

さてさて、此の娘、尼になりて、高野のふもとに天野と云ふ所にさいだちて母が尼になりて居たる所に行きて、同じ心に行ひてなむありける。いみじかりける心なるぞかし。

西行と同時代を生きた俊寛僧正の悲劇は平家物語や歌舞伎でよ

く知られているところであるが、その娘も、亡き父の菩提を天野別所で弔つたとの伝承が『源平盛衰記』(巻十一)で紹介されている。僧正が幼少より召し使つていた有王は硫黄が島まで師を尋ね、その最期を看取つて茶毘に付し、その遺骨を抱いて奈良で身をひそめていた娘の許を訪れる。

奈良の姫君に見せ奉りければ、悶え焦れて泣悲む事斜ならず。さこそ有りけめと、想像られて無慙なり。童申しけるは、御文を御覧じてこそ、御歎の色もまさる様に見えさせ給ひしか、硯も紙もなかりしかば御返事は候はず。思召されし御心の中さながら空しく止みにきとて、恨むる事の次第細々と申しければ、姫君涙に咽びて物も仰せられず、出家の志有りと仰せければ、有王丸兎角して、高野の麓天野の別所と云ふ山寺へ具し奉り、其にて出家し給ひにけり。真言の行者と成つて父母の菩提を弔ひけるこそいとほしけれ。有王も、其より高野山に登り、奥の院に主の骨を納め、卒塔婆を立て、即ち出家入道して、同じく後世を弔ひけり。

俊寛の娘は父が亡くなつていたので、天野別所にて父の世話をすることは勿論なく、亡父の菩提を弔うのみであるが、横笛と同じく、高野山にて修行する僧侶の世話を焼いた尼のことが鴨長明の『発心集』<sup>(11)</sup>巻一に見える。

筑紫のさる地方に、田畑を五十町ばかりも持つ有徳者がいた。

ある日、その豊かな稲穂を眺めているうちに、突如として「惜しみたくはへたる物、何の詮かある。はかなく執心にほだされて、永く三途に沈みなん事こそ、いと悲しけれ」と無常を悟る心が強く起った。出家を思い立つが、一旦家に帰つたならば、家族や眷属に妨げられるであろうと、そのまま何気ない風を装つてその地を離れた。

其の時、さすがに物のけしきやしるかりけん、往来の人、あやしがりて家に告げたりければ、驚きさわぎでける様、ことわりなり。其の中に、かなしくしける娘の十二三ばかりなる者ありけり。泣く泣く追ひつきて、我を捨てては、いづくへおはしますとて、袖をひかへたりければ、いでや、おのれにさまたげらるまじきぞ、とて刀を抜き、髪を押し切りつ。娘、恐れをのきて、袖をば離して返りにけり。斯くしつ、此れよりやがて高野の御山へ上つて、頭をそりて、本意のごとくなむ行ひけり。彼の娘、恐れてとどまりけれど、猶、跡を尋ねて尼になりて、彼の山のおもとに住みて、死ぬるまで物打ち洗ぎ、裁ち縫ふわざをしてぞ孝養しける。此の聖人、後には徳高くなつて、高きも賤しきも、帰せぬ人なし。

このように、天野別所には、高野山にて修行をする僧侶に献身的に世話をする尼の伝承が色濃く残っているが、それは単に、物理的な距離の関係だけに由来しているのであろうか。

そもそも天野にはもちろん丹生明神なるこの山を支配する女神が鎮まつていたのであるが、この女神と高野山との深い関係はよく知られている。

『今昔物語集』の高野山開創の神話がよく知られているが、その先蹤は、空海の『御遺告』<sup>(12)</sup>に見ることが出来る。

また、去んじ弘仁七年、表して紀伊国の南山を請ひ、殊に入定の処となす。一両の草庵を作り、高雄の旧居を去つて、移りて南山に入る。厥の峯は絶遥にして遠く人氣を阻てたり。吾れ居住の時類に明神の衛護あり。(中略)彼の山の裏の路の辺に女神あり、名づけて丹生津姫命と曰ふ。その社の廻に十町許の沢あり、もし人到り着けば即時に障害せらる。方に吾が上登の日、巫祝に託して曰く、妾神道に在つて威福を望むこと久し、方に今、菩薩この山に到る、妾が幸なり。弟子、昔現人の時に食国皇命家地を給ふに万許町を以てす。南は南海を限り、北は日本河を限り、東は大日本国を限り、西は応神山の谷を限る。冀くは永世に献じて仰信の情を表すと云云。如今件の地の中に所有せる開田三許町を見る。常庄と名づくる是れなり。

高野山で修行をする空海に対して、土地を「永世に献じて仰信の情を表」したりして、その修行を「衛護」する丹生都比売明神が祀られているのがこの天野別所なのである。



丹生都比売明神像（「高野四社明神図」京都芸大芸術資料館蔵）

そして、横笛らのように、高野山上にゆかりの男性僧侶がいる場合、まったく没交渉で、麓で生活するのではなく、西行や南筑紫上人や滝口入道に対してその身の回りを献身的に世話していたとする伝承は、高野山の仏教を守護しようと約束した丹生都比売明神の神話と重なるのである。

女人禁制たる高野山上で修行をする男性僧侶の身の回りの世話を、天野に居住する尼が行うことと、丹生都比売明神が高野山の密教を守護せんと約束したことは、少なくとも矛盾は来たさない。

横笛たちは、安んじて高野山上の僧侶の世話を焼くことが可能

となったであろう。

ところが、上述のような文脈には合致しない、横笛の天野伝承がある。

懐英の『高野春秋編年輯録』<sup>13</sup> 卷7、治承4年秋7月の記事がそれである。

齊藤滝口入道頼時登山発心。是依艶女見激動也。○伝云。

頼時與遊女横笛女交情。一時笛女以怨心故剃髮染衣。来

閑居天野里。頼時伝聞。随喜感悦慕来之。発心住山。

○此事平家物語相反。

この高野山で伝えられていた伝承によれば、時頼が高野山に登山したのは、「艶女」の「激動」を見たからであるとす。そして艶女すなわち横笛の「激動」とは、彼女が一時的に大層な「怨心」を抱くことがあり、その故に「剃髮染衣」して、この天野の里に閑居するようになったこととされる。そのことを時頼が伝えて聞いて、「随喜感悦」して、天野の里および高野山に慕い来たって発心したとされる。この流れは確かに『高野春秋編年輯録』が「此事平家物語相反」と述べているように、平家物語のそれとは相違している。平家物語では、読み本系であろうが、語り本系であろうが、まず時頼の突然の出家と、その後の横笛の絶望という順番は一致しているのである。

この高野山で語り伝えられてきた横笛伝承の異伝は、しごく簡



横笛恋塚 (天野)

略な断章ではあるが、これまでの平家物語の横笛伝承とは大きくことなった相貌を備えている。『高野春秋編年輯録』の記事では、まず横笛が出家したとされている。この異伝では、時頼(滝口)を導く善知識としての横笛、といった性格がより顕著になっている。それは、高野山にて密教の聖地を尋ね歩いてきた空海を導き、山を譲り、そして密教を守護し続けている丹生津比売明神に重なるイメージであろう。

この異伝は、長門本平家物語などの、恋破れて入水自殺を遂げる可憐な横笛像とは極北をなす横笛像と言えよう。しかし、この異伝は、奈良法華寺で病死したり、天野別所で滝口入道の袈裟衣を洗った口入道という型の伝承の先鋭化したものなのであり、これらは別箇の思想を語ってはいない。

覚一本や源平盛衰記の伝承、さらにはこの『高野春秋編年輯録』の異伝は、横笛の可憐な悲恋物語から飛翔して、横笛と

いう女性を、観音や女神(丹生都比売明神)に寄り添わせ、彼女にそれらの仏神の面影を重ねようとする伝承者の思いに由来している。それは大きく考えれば、観音や女神の現世への顕現を、中世の人々がどのように捉えていたのかという問題とも繋がっているであろう。

注

- (1) 『平家物語長門本延慶本対照本文』(勉誠出版 二〇一一年)
- (2) 覚一本『平家物語』(新日本古典文学大系本)。覚一本などは、横笛が滝口と悲しい別れをした直後に桂川で入水したという分かり易く自然な流れの展開を採用しないで、一旦、奈良の法華寺で尼となり、恋慕の心情の積りで病死したと記述する。似たような事例としては、鎌倉において、平重衡の世話をした白拍子の「千手前」の場合がある。『吾妻鏡』では、千手前は、処刑のために重衡が、「上洛之後、恋慕之思朝夕不休、憶念之所積、若為発病之因歟之由人疑之云々」(文治四年四月廿五日条)と記載されている。この顛末は十分に感動的と思われる。しかし覚一本・源平盛衰記はこの千手前を出家させている。つまりは、文学的感傷よりも仏教的論理を重んじたということであろう。横笛の場合もこの千手前と似た物語構想による展開がなされていることが読み取れる。
- (3) 『興福寺濫觴記』(大日本仏教全書)
- (4) 『秋夜長物語』(日本古典文学大系本『御伽草子』)
- (5) 『三人法師』(日本古典文学大系本『御伽草子』)
- (6) 『紀伊統風土記』(巖南堂 一九七五年)

(7) 『源平盛衰記』(芸林舎 一九七五年)

(8) 滝口入道が高野山において止住した多聞院(現在の太円院)には、次のような横笛説話の後日譚が伝わっている。

平家物語、盛衰記其意たがはず。但し、滝口入道出家の後は多聞坊浄阿と名け、治承四庚子歳七月、此山清浄心院に來り、其傍らに庵室を結ぶ。其庵室を多聞坊と呼。其坊舎跡、今清浄心谷の入口にあり。むかしは此あたり多く客坊あり。清浄心院を所依の本坊として道心者のたぐひの客僧多く來りて住すとかや。又小松大臣の墓(瀧口入道の建立と云云)及浄阿多聞坊が塚なども現に本院の傍なる地にありといふ。又梨の坊にも瀧口入道の妻横笛、鶯となりて梅の樹に來り鳴。その梅を鶯の梅と云ひ、又鶯の死せし井を鶯井といふ。古跡も残り。志かれば初には清浄心院の坊に住し、後には梨の坊に住する歟。依て盛衰記に梨の坊に住すと記せしは後の住所に従へて云。平家物語并盛衰記本異には初の住所によつて爾か書ける者ならん歟。(『紀伊統風土記高野山之部』卷之十七 寺家之七 蓮花谷堂社家)

(9) 『撰集抄』卷九(『撰集抄全注釈下巻』笠間書院 二〇〇三年)

(10) 『発心集』卷六(新潮日本古典集成『方丈記 発心集』)

(11) 『発心集』卷一。高野南筑紫上人や西行法師の事例を見るにつけ、出家者とその家族のその時点における関係は、鋭い緊張、対立関係にあったということが出来よう。その強い対立構造が、時間を経て、高野山の麓のこの天野の里においては、両者の融合、和解の関係へと移行しているさまをこの両者の事例は示している。この空間の、融合・和解という性格は、とりも直さずこの土地に鎮まる丹生津比売明神のそれが基底にあるのであろう。即ち、山上の高野山の僧侶の男性原理と、麓の天野の女神の女性原理との融

和として、この関係を考えることが出来よう。

その基底にあるのは、真言宗における、密教を守る女神の神話群ではなからうか。

同じく真言宗の影響下にあった厳島の女神も、密宗を守護せんと宣言したと、東密の伝承で語られている。鎌倉時代後期、劔阿手沢本の『厳島大明神日記』(金沢文庫蔵)及び長門本平家物語を見るに、厳島の女神がいかにか空海の密教流布に協力したかが窺える。

又擁護ノ詞ニ我一心精誠ヲヌキテ孤嶋ノ靈幽ニ詣ス。此即道心ヲオコシ仏法ヲ弘行セムガ為也。仍三十三ノ大願ヲオコス中ニ道心ノ願第一也。其文ノ心ニ云

一度参詣諸衆生 三途八難永離苦

和光同塵結縁者 八相成道常作仏

ト云ヘリ。一度参詣ノ輩ハ永ク悪道ニヲチズト御誓有。其証拠ハ弘法大師ニ御知印ヲモチテ其色ヲ顕ス。我朝ニ密宗ノ渡事ハ此ノ神ノ御願也。鎮西竈門峯ヲ去テ此嶋ニ移セ給シハ、併ラ此志ノ故也。サレバ弘法大師此神ニ生合マヒラセ給ヘリ。(中略)御入唐ノ時ハ厳島ニ詣テ七日参籠有テ願ハ、我密宗ヲ伝ト思志懇切也。三十三願ノ中ニ第一ノ御願ノ如クハ我ニ力ヲソヘサセ給ヘト祈請申サセ給フ。大明神アラタニ御対面有テ、我神武天皇ノ御代ノ立始ニ遷リタル事、併此法ヲ興行ノ為也。トク、御入唐有ベシ。我現ジテ力ヲソヘ奉ベシト云々。(後略)(『金沢文庫の中世神道資料』金沢文庫 平成八年八月)

こうした、東密とそれを守護する女神という構図も、その祖型は丹生津比売明神と空海との契約にあるのであろう。この祖型の



延長上に、東寺における稲荷山茶枳尼天、神護寺・醍醐寺における清滝権現、そして宮島の大聖院と厳島弁才天の密接な関係も醸成されたのであろう。

(12) 『御遺告』(『弘法大師空海全集』第八卷所収。筑摩書房)

(13) 『高野春秋編年輯録』巻七(大日本仏教全書)。『高野春秋編年輯録』が横笛のことを「遊女横笛」と記述していることは注目に値する。確かに平家物語諸本の中にも「横笛は先跡を尋ねれば、神崎の君の長者の侍従が娘也」(長門本)と、彼女を遊女の娘とする記載も複数ある。しかし、遊女の娘とする設定と、遊女そのものとする設定とはやはり相当な懸隔があろう。このことは、善知識としての横笛という観念と矛盾するであろうか。一見するとそのようにも感じられるが、しかし我々は中世における遊女と菩薩との不思議なイメージの重なりを伝承を知っている。西行法師は江口の里で、性空上人は室の津で、遊女の中に菩薩を見ていたと伝わるし、そしてそれは説話集のみならず、たとえば能「江口」などを通じて、一般にもよく知られていた。遊女という記述と、彼女が先に出家し、それが滝口をも導いたという、一見すると矛盾するかのような二つの事象は、遊女の中に菩薩を見る中世以来の宗教的思念を思い起こせば、その矛盾は解消するであろう。横笛を遊女の娘どころか遊女そのものと記述することは、むしろ横笛の聖性をより強く印象づけることなのであろう。